

総合科目

総合学A(メディア技術史特論)

General Studies A (The History of Media Technology)

担当: [飯田豊](#) (非常勤)・[立石祥子](#) (非常勤)・金山智子・赤松正行・松井茂

単位: 2単位 履修対象: 1年 教室: ホールA(センタービル4F) / 初回のみオンライン

学期: 後期(10月/11月)

科目のねらい・特色

20世紀の現代芸術とメディア技術の進展は、新たな価値観を日常生活に浸透させ、学術分野を再編してきました。この授業は、メディア技術に関する歴史的な視点を得ること、メディア論と表象文化論の接点を理解することを目的としています。メディア表現学における制作と研究の基盤となる、歴史意識、分析理論、実践を総合的に考えます。

到達目標

2年次の作品制作、論文執筆の準備として、自身の研究のコンテキストを明らかにすることが目標です。基本的には1年次の履修を想定しています。

講義形態

講義、ディスカッション、レポート等

講義計画・項目

9月29日(月)3、4、5限 ・ガイダンス: 教員と学生の自己紹介

10月2日(月)4、5限 ・飯田: メディア技術史の視座

10月16日(月)4、5限 ・飯田: オルタナティヴ・メディア技術史

10月23日(月)4、5限 ・赤松: オルタナティヴ・メディア技術論

11月6日(月)4、5限 ・金山: ケア・コミュニケーションとメディア

11月20日(月)4、5限 ・立石: メディア・イベント研究の視座

11月27日(月)4、5限 ・立石: アートとメディア研究の接合点

評価方法

種別	割合	備考
課題	30%	レポート、発表等
日常点	70%	授業への参加度

総合学B(表象文化学特論) General Studies B (Representation x Culture)

担当: 大久保美紀・[門林岳史](#)(非常勤)・松井茂

単位: 2単位 履修対象: 1年

学期: 夏季集中(7月) 実施方法: ホールA(センタービル4F)

科目のねらい・特色

メディア表現(ここで云うメディア表現は、アートやデザインなどの表現活動に限局されず、より広大かつ精密な社会行為や精神現象を含めます。また同時にそれらの表現に対する批評や評論などの行為もまたメディア表現の範疇に含めます)に関わる現実的かつ現代的問題を讀解するために、さまざまな時代と人物、作品を事例にあげ、表現者ないし研究者としていかなる思考＝志向＝試行が可能かつ必要となるかについて自覚的に考える契機を討究します。いわばこの世界をいかに解釈するかということにポイントを置いた内容をめざします。独自の世界解釈によって、世界へと投げ出された自身を回収するための知的技術を学ぶ、と言い換えることもできるかもしれません。その意味で、本講義は表象文化論(Representairon and Culture)の様相を呈した講義に近似したものになるでしょう。

到達目標

自身の専門領域の文献を読んだり作品を分析するのはもちろんのことですが、ここではむしろ専門領域から遠く隔たった分野の知性にアプローチして、そこから自身の研究へと牽引し、自身の仕事を客観化・相対化できるような手法を獲得することがむしろ重要です。

本講義を通して「知らないことを知る」ばかりでなく「知っていたことが知らないことだった」と自覚することができればいいと考えています。「知らないこと」よりも「知っている(知っていたはずのこと)」のほうに懐疑的になる感覚を身につけて下さい。

講義形態

講義、ディスカッション、レポート等

講義計画・項目

7月31日(月)2、3、4、5限 大久保: 身体表象: ファッション、あるいは纏う身体／コスプレ、あるいはポストアイデンティティ

8月1日(火)2、3、4、5限 大久保: 身体表象: 医療における身体／記憶としての身体

8月2日(水)2、3、4、5限 門林: ポストメディア論／ポストヒューマン論

8月3日(木)1、2、3限 門林、大久保: 口頭発表＋ディスカッション

講義計画・項目

評価方法

種別	割合	備考
課題	30%	レポート、発表等
日常点	70%	授業への参加度

総合学C(文化資源学特論) General Studies C (Cultural Resources)

担当: 松井茂・[佐藤知久](#)(非常勤)・大久保美紀・[渡部葉子](#)(非常勤)・

単位: 2単位 履修対象: 2年 教室: 講義室W(W301)他

学期: 前期(4月/5月/6月) 実施方法: 対面

科目のねらい・特色

表現の手段とそれを伝える場との関係は個別化・多様化しつつ密接に関わっており、それらを支えるメディア技術は、グローバル資本主義下の監視や検閲、規格化・均質化と無縁ではありません。選択的にメディアを用いて社会との接点を切り結ぶ表現のありようは、人類学的な観点からも注目されています。研究や展示におけるアーカイブ資料の活用事例のほか、作家による二次創作、展示計画を通じて、メディア表現研究のコンテクスト＝歴史観を構築する手がかりとし、修士研究の基盤となる思考を身につけて欲しいと考えています。

到達目標

文化資源学特論では、文化人類学の知見から[佐藤知久](#)(京都市立芸術大学芸術資源研究センター教授)、アーカイブ学の知見から[渡部葉子](#)(慶應義塾大学アート・センター教授)による実践方法を学び、その方法論を身につけることを目標としています。同時にそうした方法論の背景となる知識を授業全体から学び、身につけてもらいたい。

講義形態

講義、ディスカッション、レポート等

講義計画・項目

4月12日(水)5限・松井、大久保: ガイダンス: 教員と学生の自己紹介

4月21日(水)3、4限・松井: 建築をめぐるコミュニティ・アーカイブの取り組み

4月27日(木)4、5限・佐藤: "リサーチする"—現代世界に入りこむ方法としてのフィールドワーク

5月1日(月)1、2限・佐藤: ドラッグ・クイーン 触発するフェティッシュあるいは最も美に近い創造物としての

5月2日(火)1、2限・大久保: グローバル資本主義下の検閲、規格化、均質化

5月12日(金)4、5限・大久保: 表現の手段とそれを伝える場との関係

5月30日(火)3、4限・渡部: Object Based Learning 1

6月2日(金)4、5限・渡部: Object Based Learning 2

評価方法

種別	割合	備考
課題	30%	レポート、発表等
日常点	70%	授業への参加度